「どんな町にも“知の広場”を」

1999年、セックス・ピストルズの元マネージャー、マルコム・マクラーレンが、ふざけ半分、本気半分でロンドン市長選に出馬した時、その公約は「国会議員専用売春宿とバー併設図書館をオープンさせる」というものだった。「ディケンズを読みながら、ギネスを飲めたら最高ね」と語るのは、旧き良き時代のパンクロッカーならぬ、パンク挑発者が掲げた公約のうち、後者を引き受けようとする歴史的図書館員、アントネッラ・アンニョリ氏。 先日出版されたばかりのとても興味ぶかい著書『知の広場』（ラテルツァ／邦訳みすず書房）では、新しい図書館の視点から都市空間の捉え直しが提案され、図書館は、学力や国語力の低下が著しいこの国を復興させる場所として考えられている。いまや大学では外国人学生ではなく、自国の18歳の若者のためにイタリア語の補講を行っている。彼らは「たった二行の文章も正確に書けないの」である。

Diario di lettura

Antonella Agnoli

Tra le maggiori esperte di biblioteche, consulente internazionale per rinnovare le «case della lettura», luoghi di rinascita di un Paese sempre più ignorante

“In ogni città ci vuole una piazza del sapere”

アンニョリさん、よく知られているように、イタリアではほとんど本が読まれません。読書率はヨーロッパで最低です。本を買う人が前年より0.1%でも増えたら、それだけでああ良かった！と思うような状況です。それなのに、『知の広場』では読書率を上げるための具体策だけでなく、ある種の希望さえ写し出しています。これは誇張しすぎではありませんか？

「『知の広場』は、長い間考えてきたことから生まれました。

私は図書館で33年間働いてきました。近年は、図書館を捉え直すという視点から、空間設計やサービスの設計にたずさわっています。私は、町にとって図書館とは何かということを、政治的観点からも知ることができる本を書きたいと思っていました。ペーザロの図書館は良い建築・充分な開館時間・もてなしの雰囲気を兼ね備えた図書館です。つまり、幸福で機能的な場所です。図書館員が行政と話し合う際にも参考になる本になると思います。行政は、なぜ図書館に予算が必要なのかということについて、まず理解していませんから。本の中では、歴史的な図書館、保存のための図書館については触れませんでした。イタリアではほとんど本が読まれないこと、それから、現代人というのは、「すべて欲しい、すぐに欲しい」ということを頭に入れておかなければいけません。つまり、このインターネット時代に、どうして図書館に行くのか、ということを私たち図書館員は考えなければならないのです。

文庫本もありますし、少なくとも私たちの住む中北部イタリアには、書店も充分にあります。けれども、貸出数が減り利用者数は増えるという、デンマークのような国もあります。それは図書館が広場のように生きられていて、商業モデルの案になっているからです。つまり、図書館は都市計画の一部になり得るのです。テクノロジーが発達し、必要な情報を選ぶ術を知らず、町は暮らしにくいという情況下では、本は経済価値を帯びてきます。私は、若者の足を図書館に向かわせ、今の風潮を逆転できると確信しています。若者に、彼らのための場所を提供し、彼らの生活に関わるもの、つまり音楽や映画やマンガなどを提供するのです。現実では、国は教育に予算を使わないと決めました。しかし図書館は、町の全てのサービスを横断する公共機関です。図書館は、予算削減の時代の放課後の居場所や、コンピューター時代を生き抜く高齢者たちの寄合所として機能し、他所からやってきた人にとってはその土地に溶け込むきっかけとなるような場所であるべきなのです」

ペーザロの後には、ロンドンの〈アイデア・ストア〉から、再設計（リスタイリング）プロジェクトに協力を求められていますね。これまであなたご自身がどのような道を歩まれてきたのですか？

「1976年に図書館で働き始めました。ヴェネツィアの地方都市スピネアでです。私はそれまでに図書館学を学んだことも、図書館で働いたこともありませんでした。スピネア図書館は、美しいヴェネト風ヴィッラに付設されており、そこには大きな庭がありました。そこで、私は子どもから始めることにしたのです。当時、革新的な本作りをしていたエンメ出版社の絵本やムナーリの絵本などを選びました。お母さんたちを私の所に連れてきてくれたのは、子どもたちです。お母さんたちは、小さくなりながら、恥ずかしそうに図書館に入ってきました。それを見て、私は恋愛小説もそろえなければと気づきました。図書館で子どもとお母さんの“ハーモニー”が生まれるようにです。するとすぐに市民の3分の1が利用登録をしました。もしトレッカーニ出版（※百科事典専門の出版社）の本を置いていたら、図書館でもう一度お母さんたちに会うことはなかったと思います。私は子どもからたくさんのことを教わりました。貸出は３冊までと子どもに向かって言えますか？　本の冊数は、彼らが読書にかける時間です。映画や音楽についても同じです」

そうはいっても、イタリアでは、その成長過程で、子どもたちは読書から離れてしまいます。書店員もよく嘆いています。

「私は楽観主義者ですし、なんなら闘争家と言ってもいいです。闘うことは必要ですし、けっして屈してはいけません。もちろん、そうするのは大変です。なにせ、すべてが向かい風ですから。時間は足りない、どこでも予算はカット、テレビはある、政策には展望がない、と。最近、コロンビアのボゴタで新しい図書館がオープンしましたが、その投資目的は都市の再建でした。うまく行っているようなので、是非見に行きたいと思っています。子どもの話に戻ると、移民の子どもたちにとっては、文化はさらに価値があります。学校に行って楽しく過ごせることは彼らにしたら、私たちが60年代に社会の解放を求めたのと同じように、意味のあることなのです」

本への愛情はどのようにして生まれたのですか？

「私は人に愛情をもっていて、そしてもちろん、本を読む人が好きです」

僕が書店員だった頃、やってみたいと思っていたことについて、素朴な質問をさせてください。図書館で勤務中、本をよく読みましたか？

「私は読書家ではありません。あらやだ、本を読まない図書館員の典型になるのはいやですね。でも、たくさんのことをしていましたから。家にはテレビがないので、クラシック音楽をよく聴きます。バッハやショスタコーヴィチ、ベートーヴェンの弦楽四重奏歌曲、マーラーのリュッケルト歌曲集などをよく聴いています」

あなたの師匠は？

「前提として、私は独学です。ルイジ・クロチェッティは、私にとって偉大な図書館員でした。彼は決して問題の解決法を与えることはしません。そうではなく、考えるように促しました。ヴェネツィアで、ビエンナーレのために仕事をした時、フランコ・バザーリヤ（※精神科医）とルイジ・ノーノ（※作曲家）と知り合いました。外食に出れば知り合いができました。あの頃が私の下積み時代です。その前には、ベッルーノで、居酒屋に行ってはお年寄りの話をよく聞いていました」

あなたにとっての重要な作家は？

「時代ごとにその時代の作家がいます。若い頃は、トーマス・マンの『魔の山』。でも、今はどうかしら。人は変わりますから。今は推理小説をよく読みます。例えばジャン・クロード・イッツォなど。推理小説は、都市で起こる事象を先取りし、新聞よりも早くそうしたことを教えてくれます」

これからしたいことは？

「図書館SOS窓口を開きたいですね。図書館を変えようとするときに、助けとなるようなサービスです。今ある図書館を居心地よく、魅力的に変える方が、新しい図書館を建てるよりもお金はかかりません。図書館は背後にたくさんの偏見を抱えています。どうしたらそうした偏見を覆せるか、それを考えなくてはなりません」

インタヴュー・執筆：ジュゼッペ・クリッキア
※訳者注

（「ラ・スタンパ」紙／2009年11月28日号）